

医療技術短期大学部学生のパーソナリティと 教育に関する研究 ②

—質問紙法性格検査を用いて—

菅 佐和子, 任 和子, 池本 正生
浅川 康吉, 山根 寛

The Personality Traits of Our Students

Sawako SUGA, Kazuko NIN, Masao IKEMOTO
Yasuyoshi ASAKAWA, Hiroshi YAMANE

ABSTRACT: This study examined personality of co-medical students by Self-Esteem scale and TEG. The subjects consisted of 362 students who had entered our school from 1991 to 1993. The breakdown of them by department was as follows. There were 199 subjects in nursing students, 86 subjects in medical technology students, and 77 subjects in physical therapy and occupational therapy students. The results indicated following three points.

(1) No significant difference among the departments was shown in the score of Self-Esteem scale, and difference among the school years was similar results.

(2) As for the score of lower scale in TEG, significant differences among the school years were shown in the both of CP score and FC score, significant difference among the departments was shown in A score, significant differences among the departments and among the school years were shown in NP score.

(3) SE score related to AC score in the department of nursing. Mutual relationships between SE score, AC score, and A score were existed in the department of medical technology and in the department of physical and occupational therapy.

Key words: Personality traits, Self-Esteem scale, TEG.

はじめに

筆者らは先年、医療技術職を志す学生に対する教育・指導の充実を目指すうえで学生のパーソナリティをより深く理解することが必要であると考え、内田・クレペリン精神検査を用いた調査研究を施行した¹⁻⁵⁾。

本稿はそれに引き続いて、学生のパーソナリ

ティを理解するためにR式SE尺度と東大式エゴグラムを用いて行った調査研究の結果を報告するものである。

今回使用したR式SE尺度と東大式エゴグラムはいずれも質問紙法性格検査であり、被検者が意識化しているレベルでの自己の特徴が表れるものである。そのため、その結果が他者からの観察結果とは必ずしも一致しない場合もあり得る。また、投影法によって測定されるような無意識レベルでの特徴までは含んでいないとみなされる。しかし、個人が自分をどのように捉

え, どのように感じているかは, その人の適応を規定する重要な要因となることも周知の事実である。とりわけ, 自己に対する評価的感情の高低は, その人の適応状態と密接にかかわっていると考えられる。そのため, 本研究においては, まず学生に自己評価感情 (self-esteem) を測定するために R 式 SE 尺度を用い, 次により多角的にパーソナリティの特徴を知るため東大式エゴグラムを用いることにした。

R 式 SE 尺度の実物は付表 1 に示した。本尺度は Rosenberg, M⁶⁾ によって作成された尺度を星野⁷⁾の邦訳に基づき, 菅⁸⁾が日本語版に修正・翻案したものである。(菅は心理臨床の場において長年この尺度を用い, その有用性についての実感を得た上で, 再検査信頼性, 併存的妥当性, 因子分析による項目内容の検討などの作業を行い使用可能性を確認している。)

本尺度の得点 (SE 得点) の range は 10~40 で, 一般的な女子青年を対象とする従来の研究では平均値は 23~25 程度であることが多かった。本尺度の結果を眺める際のポイントは, その群内でとりわけ SE スコアの低い者, 高い者に注意を払うことである。SE スコアのきわめて低い者は, その時点で何らかの自己不全感, 自己無価値観にとらわれ, 不適応状態にあることが多いとみなされる。逆に, SE スコアのきわめて高い者は, (理論的には SE が高いほうが自己確信に富み自己肯定的ということになり適応がよいはずであるが), ときにはあまりに自己愛的であったり, 自己防衛としての見せかけの自己過大評価をしているにすぎない場合も稀ではないと考えられる。SE スコアの低い者に対しては, 何はともあれその人を支えるような暖かい援助の手が望まれよう。それに対し

て, SE スコアの高い者に対しては, 一義的な対応策を云々することは困難であるかもしれない。SE スコアの高い者がかかえているかもしれない問題にも心を向けながら, ここでは, 低い者に対する暖かい援助の手の必要性を指摘するにとどめたい。

次に東大式エゴグラム⁹⁾であるが, これは周知のもの故, 詳しい説明は省略する。ただ, 個人の意識化されたレベルでのパーソナリティを, CP (批判的な親), NP (養育的な親), A (冷静で合理的な大人), FC (自由気ままな子ども), AC (順応している子ども) という 5 つの要素に分けてとらえるものであり, 各要素の得点の range は 0~20 となっている。

本研究においては, これらのふたつの尺度を別々に検討した後, 両尺度の関連性についても言及することにした。

目 的

1991 年度~1993 年度に京都大学医療技術短期大学部に入学した学生のパーソナリティについて, R 式 SE 尺度と東大式エゴグラムを用いて調査し, 検討を行う。

方 法

被検者: 1991 年度~1993 年度の本学部入学生のうち, R 式 SE 尺度と東大式エゴグラムを受検したもの (但し, 男子学生は少数のためデータから除外し, 女子のみを対象とした)。

被検者の群分けは, 看護学科群 (以下, N 群), 衛生技術学科群 (以下, MT 群), 理学療法学科+作業療法学科群 (以下, POT 群) の 3 群とした。理学療法学科と作業療法学科を合併したのは, 他群に比べて人数が少ないため統計処理上の便宜のためである。各群の構成人数は表 1 に示した。

検査時期: 各年度の 6 月下旬~7 月上旬

測定尺度: R 式 SE 尺度

東大式エゴグラム

検査手続: 「心理学」の授業のなかで, 目的を明らかにした上で, 無記名, 集団式にて施行

表 1 被検者一覧

年 度	N 群	MT 群	POT 群
1991 年度	69 人	30 人	28 人
1992 年度	62 人	25 人	30 人
1993 年度	68 人	31 人	19 人
計	199 人	86 人	77 人

した。

結 果

(1) 群別、年度別の SE スコアおよびエゴグラム下位尺度の得点 (CP スコア, NP スコア, A スコア, FC スコア, AC スコア) の平均と

標準偏差を示したのが表 2 である。

(2) 表 2 をもとに、群別に各年度のエゴグラム下位尺度得点を折れ線グラフで示したのが図 1-1 ～図 1-3 である。

(3) 表 2 をもとに、年度別に各群のエゴグラム下位尺度得点を折れ線グラフで示したのが図

表 2 SE スコアおよびエゴグラム下位尺度得点

群		SE	CP	NP	A	FC	AC
N 群	1991年度生	24.16 (4.96)	8.57 (3.09)	14.90 (2.35)	10.75 (3.20)	13.97 (3.51)	12.43 (4.03)
	1992年度生	25.13 (5.51)	11.10 (3.28)	13.87 (3.65)	10.60 (3.74)	11.52 (3.93)	11.73 (4.38)
	1993年度生	22.83 (4.25)	10.51 (2.95)	14.85 (2.96)	11.24 (3.43)	11.74 (3.72)	11.71 (3.70)
MT 群	1991年度生	23.93 (5.02)	7.90 (3.57)	13.20 (2.62)	10.20 (3.65)	13.26 (2.98)	10.70 (3.57)
	1992年度生	23.60 (6.40)	10.60 (3.76)	11.24 (3.22)	9.84 (3.50)	12.48 (3.98)	11.72 (4.41)
	1993年度生	24.42 (4.31)	9.48 (3.70)	12.45 (3.51)	11.23 (4.47)	10.81 (4.31)	12.00 (4.36)
POT 群	1991年度生	25.79 (4.69)	8.50 (3.77)	13.68 (3.04)	9.29 (3.51)	14.11 (2.48)	10.32 (4.52)
	1992年度生	25.33 (5.50)	10.07 (3.17)	14.90 (3.23)	9.77 (2.90)	10.80 (4.45)	12.40 (4.17)
	1993年度生	25.47 (4.22)	10.11 (3.94)	16.84 (2.99)	8.74 (2.79)	12.63 (3.59)	11.58 (4.32)

平 均
(標準偏差)

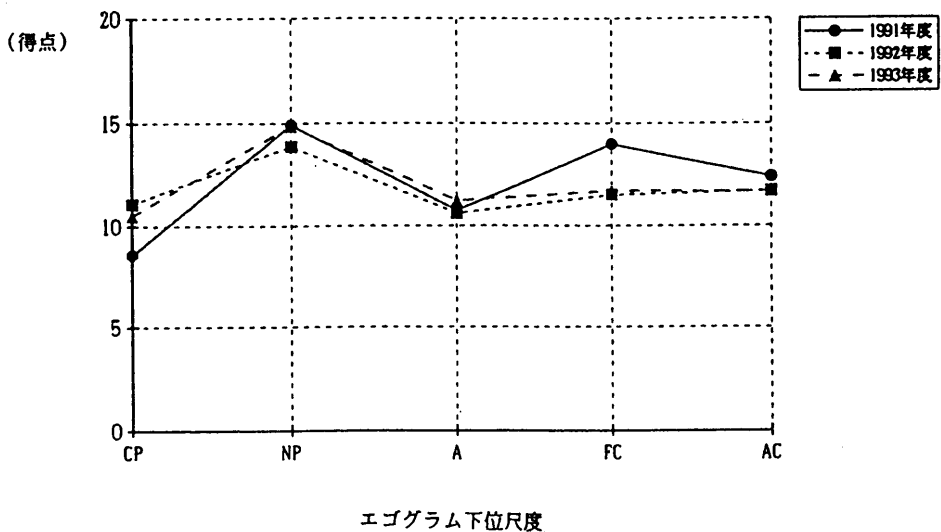


図 1-1 N 群 年度別エゴグラムプロフィール

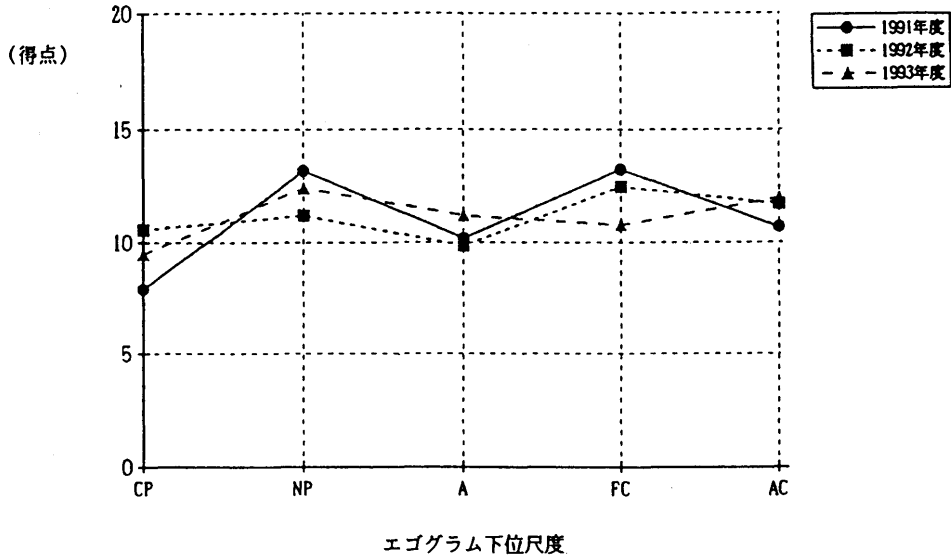


図1-2 MT 群 年度別エゴグラムプロフィール

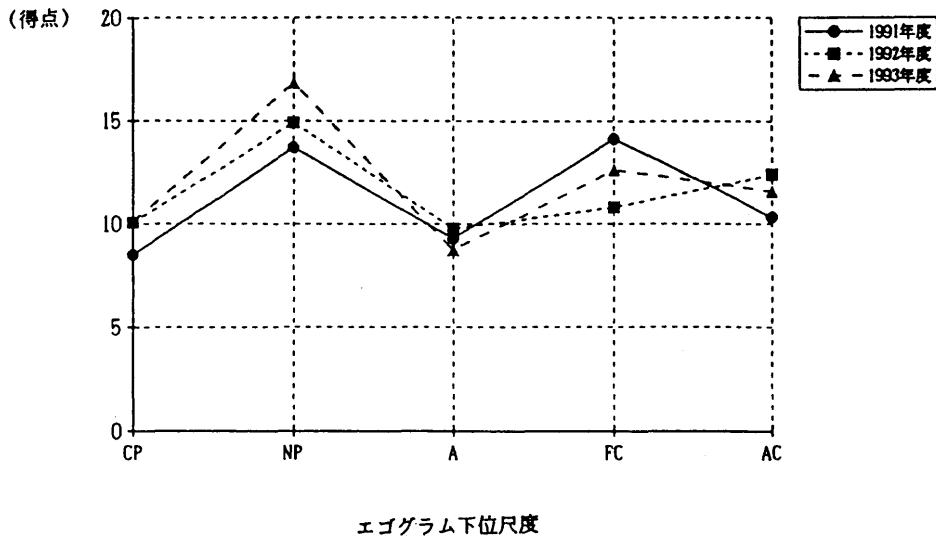


図1-3 POT 群 年度別エゴグラムプロフィール

2-1～図2-3である。

(4)表2をもとに, SE スコアおよびエゴグラム下位尺度得点について, 群(3)×年度(3)の2要因分散分析を行った(各水準の下位検定についてはニューマン・クルーズ検定による)。結果は以下の通りである。

① SE スコア

主効果と交互作用はすべて有意ではなかつ

た。

② CP スコア

年度の主効果 ($F((2.53)) = 12.99, P < .01$) が有意であった。

③ NP スコア

群の主効果 ($F((2.353)) = 21.10, P < .001$) と年度の主効果 ($F((2.353)) = 4.84, P < .01$) および群と年度の交互作用 (F

$((4.353))=3.57, P<.01)$ が有意であった。
交互作用が有意であったため、単純主効果の検定を行った結果は以下の通りである。

- POT 群における年度の単純主効果
 $F(2.74)=5.88, P<.01$
- 91年度生における群の単純主効果
 $F(2.124)=5.35, P<.01$
- 92年度生における群の単純主効果
 $F(2.114)=8.12, P<.01$

- 93年度生における群の単純主効果
 $F(2.74)=5.88, P<.01$

④ Aスコア

群の主効果 ($F((2.353))=5.60, P<.01$) が有意であった。

⑤ FCスコア

年度の主効果 ($F((2.353))=11.26, P<.01$) が有意であった。

⑥ ACスコア

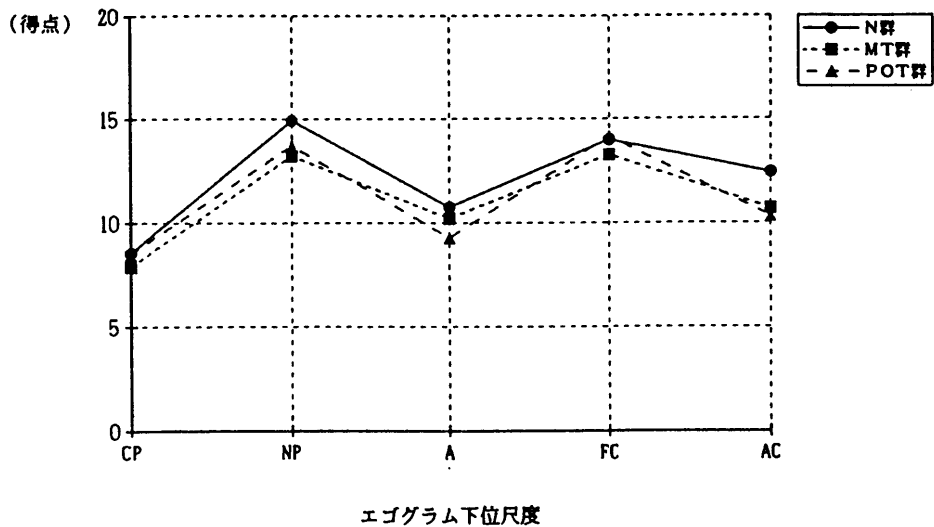


図2-1 1991年度 群別エゴグラムプロフィール

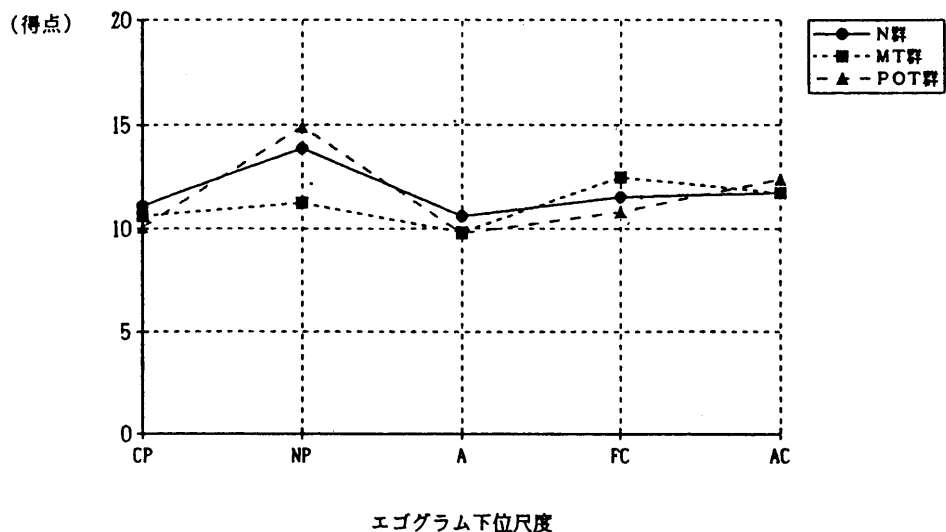


図2-2 1992年度 群別エゴグラムプロフィール

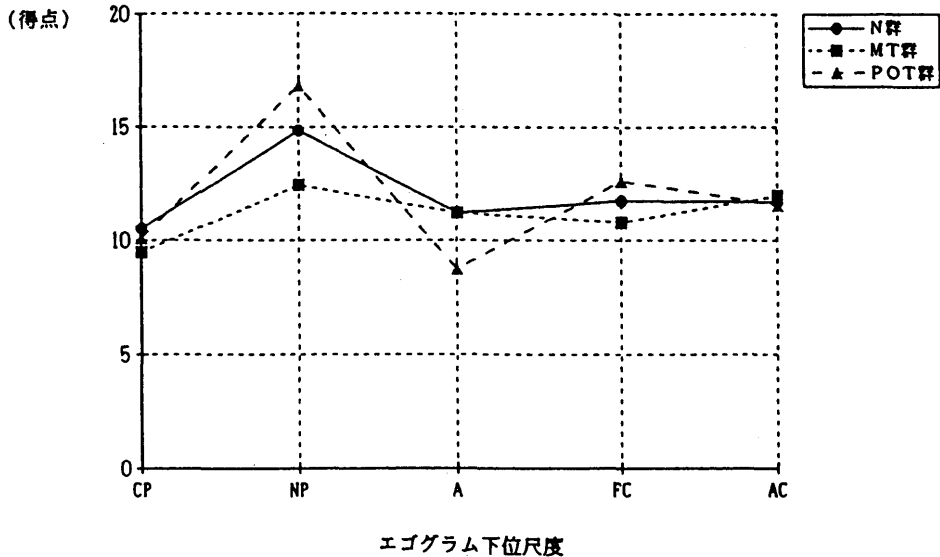


図2-3 1993年度 群別エゴグラムプロフィール

主効果と交互作用はすべて有意ではなかった。

(5)群ごとに SE スコアとエゴグラム下位尺度得点の関連性 (ピアソンの積率相関係数) を調べたのが表3である。

考 察

(1) SE スコアより

SE スコアの平均は、全群、全年度において 23~26の範囲におさまっており、有意差はみとめられなかった。これは、一般的な女子青年の SE の高さとしてはごくふつうのレベルであるとみなせよう。

SE スコアの場合、何点以上が「高い」、何点以下が「低い」といった絶対的な基準は確立していない。ただ、経験的にみれば、30以上を

「高い」、19以下を「低い」とみなしてもあながち的はずれではないように思われる。ちなみに、今回の被検者のなかで30以上のスコアを出した人数、19以下のスコアを出した人数を下記に示した。

<30以上>

	N 群	MT 群	POT 群
91年度	9人	4人	6人
92年度	13人	3人	6人
93年度	5人	2人	3人

<19以下>

	N 群	MT 群	POT 群
91年度	11人	5人	2人
92年度	11人	5人	5人
93年度	13人	3人	3人

表3 SE スコアとエゴグラム下位尺度得点との相関係数

	N 群 SE	MT 群 SE	POT 群 SE	計 SE
CP	.06	.04	.06	.05
NP	.22	.24	.20	.23
A	.09	.32	.20	.16
FC	-.14	.00	-.01	-.07
AC	-.40	-.43	-.47	-.42

SE の「高い」被検者の特徴については、前述のように、一義的に論じることは困難であろう。一方、SE の「低い」被検者については、おそらく何らかの不応状態にあることが推測される。各群、各年度において、約10~20%の被検者がそのような状態にあることは見落とされてはならないであろう。SE の低さというのは、あくまでも本人の内的な問題である。外側

から一方的にアプローチすることは困難であるが、本人が望むときに心理的援助が受けられるような体制が整備されることが望まれよう。

(2) エゴグラム下位尺度得点より

全体としては、相対的に CP スコアが低く、NP スコアが高く、A スコアが低いというプロフィールが描かれている。

N 群においては、91年度は FC スコアが高く AC スコアが低く、M 字型に近いプロフィールとなっているが、92年度、93年度は FC スコアが低下して AC スコアとほぼ横並びになっているのが目につく。N 群の91年度生は、92年度生、93年度生に比べてより自由奔放で活発、自己中心的傾向が強かったということであろうか。

MT 群においては、91年度生と92年度生はいずれもほぼM字型になっているが93年度生は、FC スコアが低下し AC スコアよりも低くなっているのが注目される。93年度生は、より協調的、従順、慎重になり、自分をおさえる傾向が強いということかもしれない。

POT 群においては、91年度と93年度はM字型に近いが、92年度のみは FC スコアが低下し AC スコアより低くなっている。

これらを総合すると、3 群とも91年度は FC スコアが相対的に高く、N 群では92年度と93年度がいずれも低下、MT 群では93年度のみが低下、POT 群では92年度のみが低下していることが判る。分散分析の結果からみても、年度間に有意差がみとめられている。

CP スコアに関しても年度間に有意差がみとめられている。3 群とも、FC スコアとは逆に CP スコアは91年度が相対的に低くなっている。いずれの群においても91年度生というのは、自他に対する批判的な厳しさは少なく、自由奔放な伸びやかさを謳歌していたと推測される。92年度生、93年度生になると、このような傾向が多少なりとも薄れてきたということであろうか。

冷静で合理的な判断力を表す A スコアに関しては、年度間での有意差はみとめられないが群間での有意差がみとめられている。他の 2 群も

とりたてて A スコアが高いわけではないのだが、それより更に低いのが POT 群である。POT 群は、打算的になったり無味乾燥になったりすることはないが、その分、合理性や冷静沈着さといった要素にも乏しいという傾向がみとれよう。

NP スコアに関しては、群間にも年度間にも有意差がみとめられた。全体的にみて NP スコアが相対的に高いことが本被検者の何よりの特徴である。受容的、共感的で世話好きな側面を表わす NP スコアが高いことは、対人援助職を志す学生としてはきわめて大切な特徴といえるであろう。

群間で比較した場合、他の 2 群に比べて NP スコアが低いのは MT 群である。N 群と POT 群の将来の仕事は直接に人間にかかわるものであるが、MT 群のそれは、より間接的なかわりが主になるものである。MT 群と他の 2 群の間に NP スコアに関して差異がみとめられたのは、十分に了解できることであろう。

(3) SE スコアとエゴグラム下位尺度得点の関連性

N 群においては、SE スコアと AC スコアとの間に -0.40 の負の相関がみとめられた。

MT 群においては、SE スコアと AC スコアとの間に -0.43 の負の相関が、A スコアとの間に $.32$ の正の相関がみとめられた。

POT 群においては、SE スコアと AC スコアとの間に -0.47 の負の相関が、みとめられた。

また、全群をまとめると、SE スコアと AC スコアとの間に -0.42 の負の相関が、みとめられた。

SE スコアが低い被検者は AC スコアが高くなる傾向があるというのは、きわめて了解しやすい結果である。自己に対する確信や評価が低い場合、どうしても他者に気をつかい、従順に、遠慮がちにならざるを得ないと考えられる。そもそも、SE 尺度と AC 尺度は質問項目自体によく似たニュアンスのものが多くあり、この両者に関連性がみとめられるのは当然といってよいであろう。

SE スコアと A スコアとの間には, N 群を除いた 2 群において正の相関がみとめられた。とくに MT 群においては, SE スコアの高い被検者が自己を理性的, 合理的, 冷静沈着とみなしているのは十分に了解可能なことである。このような特徴は, MT 群の専門分野の学業に適応する上で大切な要因であるとみなせよう。一方 N 群においては, このような特徴は自己評価や自己受容とは一義的にはあまり関係がないということであろうか。

このあたりの差異は, 専門分野とパーソナリティとの関連性を考える上できわめて興味深いところであり, 更なる研究が望まれる。

付表 1 R 式 SE 尺度

次の各項目について, あなた自身にどの程度当てはまるか, 尺度上の該当する点に○をつけなさい。

(1) 私は, すべての点で自分に満足している。	そう	ちがう
(2) 私は, ときどき自分がまるでだめだと思う。	そう	ちがう
(3) 私は, 自分にはいくつか見どころがあると思う。	そう	ちがう
(4) 私は, たいていの人がやれる程度には物事ができる。	そう	ちがう
(5) 私には, あまり得意に思うことがない。	そう	ちがう
(6) 私は, ときどきたしかに自分が役立たずだと感じる。	そう	ちがう
(7) 私は, 少なくとも, 自分が他人と同じレベルに立つだけの価値ある人間だと思う。	そう	ちがう
(8) もう少し自分を尊敬できたならばと思う。	そう	ちがう
(9) いつでも自分を失敗者だと思いがちだ。	そう	ちがう
(10) 私は, 自分自身に対して前向きな態度をとっている。	そう	ちがう

お わ り に

医療技術職を志す学生のパーソナリティについて 2 種の質問紙 (R 式 SE 尺度と東大式エゴグラム) を用いて検討を行った。被検者は 1991 年度～1993 年度の本医療技術短期大学部の入学生 362 人である (内訳: 看護学科生 199 人, 衛生技術学科生 86 人, 理学・作業療学科生 77 人)。結果は以下の通りであった。

(1) R 式 SE 尺度の得点に関しては, 学科間にも年度間にも有意差はみられなかった。

(2) 東大式エゴグラム下位尺度得点に関して

は, CP スコアと FC スコアにおいて年度間に有意差がみられた。A スコアにおいて学科間に有意差がみられた。NP スコアにおいて学科間と年度間の両方に有意差がみられた。

(3) 看護学科においては, SE スコアと AC スコアとの間に関連性がみとめられた。

衛生技術学科および理学・作業療学科においては, SE スコアと AC スコア, A スコアとの間に関連性がみとめられた。

謝辞

末尾ながら, 被検者として本調査に御協力下さった皆様, データ分析に際して御協力を頂いた方々に心より感謝いたします。

文 献

- 菅 佐和子, 川井 浩: 医療技術短期大学生のパーソナリティと教育に関する研究—内田クレベリン精神検査と学業成績との関連性について—。京都大学医療技術短期, 大学部紀要別冊, 健康人間学, 1994; 6: 1-14
- 内田宏美, 任 和子, 猿田裕子他: 看護学科学生のパーソナリティと教育に関する研究。京都大学医療技術短期大学部紀要別冊, 健康人間学, 1994; 6: 15-22
- 池本正生, 岸下雅道: 本学衛生技術学科学生の資質向上を目指した教育・指導に関する研究。京都大学医療技術短期大学部紀要別冊, 健康人間学, 1994; 6: 23-29
- 浅川康吉, 武田 功: 理学療学科学生のパーソナリティと教育に関する研究。京都大学医療技術短期大学部紀要別冊, 健康人間学, 1994; 6: 30-41
- 山根 寛, 木村信子, 梶原香里, 松本雅彦: 作業療学科学生のパーソナリティと教育に関する研究。京都大学医療技術短期大学部紀要別冊, 健康人間学, 1994; 6: 42-54
- Rosenberg, M.: Society and the adolescent self-image. Princeton: Prinseton Univ. Press, 1965
- 星野 命: 感情の心理と教育 (2)。児童心理 1970; 24: 1455-1477
- 菅 佐和子: SE (Self-Esteem) について。看護研究, 1984, 17(2): 21-27
- 末松弘行, 和田迪子, 野村 忍, 俵 里英子: エゴグラム・パターン—TEG 東大式エゴグラムによる性格分析—。東京: 金子書房, 1989